



Vol.37

ゆうことみゆきのふくふくトーク

ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ノヤ(ヨモギ)



二風谷で暮らしていた頃、毎年春になると萱野茂先生の奥様のれい子さんが、ヨモギ餅を作ってくださいました。

ご自分でヨモギの新芽を摘み、手作りのあずき餡をくるんだツルツルのお餅。ヨモギの香りがフワッと立ちのぼり、間違いない、どんな有名店のお餅よりも美味しかったっけ…大切な思い出です。

ヨモギはアイヌ語でノヤ。葉っぱを髪に刺して虫よけにしたり、囲炉裏にくべて煙で蚊を追い払う「蚊遣り」にしたり。歯が痛む時には潰した汁を虫歯の穴に垂らしたりもしたんだって！もっともヨモギの薬効は世界中で知られていて、日本でも戦後大量に生産された駆虫剤は、ヨモギが原料だものね。



日高地方には、アイヌモシリ(人間の大地)で一番初めに生えた草はヨモギだと言い伝えが残されている。そして、そのヨモギの茎を束ねて作ったのが最強の神「ノヤイモシ」。姿はちよつと藁人形に似てるけど、5つ(あるいは6つとも)の心臓を有し、手には槍を持ち、村を襲いにくる病魔などの悪神と戦うの。本来、偶像崇拜をしないとされるアイヌ文化においては、異色の神です。これも人々がヨモギに「霊力」を感じたからでしょうね。そういえば、日本の昔話「食わず女房」でも、山姥に追われた男は、ヨモギとシヨウブの草わらの中に入ったことで命拾いしたんだよね。やつぱりヨモギ、タダモノじゃない…。

美幸さん、ヨモギにまつわるお話は？



ヨモギで思い出すのは千歳にお住まいだった中本ムツ子さん。ずいぶん前になりましたが、一緒に登別の森を散策した時のこと。蚊が耳元で羽音をたててまとわりついてきたので手で掃っていたら、ムツ子さんがヨモギの葉を頬っぺたのこめかみあたりに挿したの。「ノヤの葉っぱを挿しておけば臭いで虫は寄ってこないし、傷薬や血止めに

寄ってこないし、傷薬や血止めに



もなるの。葉をヌヤヌヤ(揉み揉み)してつければ腫れも引いて痒みもとれるんだよ。」って、蚊に刺された私の腕もヨモギの葉で拭いてくれたの。すぐに痒みも腫れも治まりました。お見事！

白老では悪いものを祓い清める祭具のタクサ(手束)にヨモギが使われます。「フッサツ！フッサツ！」という掛け声とともにタクサでその場を掃き清め悪神を祓うの。以前、チセ(伝統家屋)が焼失した時、ニウエンホリツパ(魔払いの行進)をしたんだけど、女たちが手にタラノキの杖とヨモギのタクサを持って「ホオーイ、ホオーイ」と細く高い声を出しながら行進をしたの。タラノキの棘とヨモギの臭気、どちらも強い力があると信じられているからね。

新築儀礼の魂入れ、チセサンペトウカン(家の心臓を射る)でも、ラブ(翼)を刻んだヨモギの矢が魔除けとして使われるし、物語にも金の矢をも蹴散らした魔物が小さなヨモギの矢で退治される話も。ヨモギが金よりも強く偉大な力をもつと考えられてたってことだよな。

食べてよし、薬でよし、魔神をも倒すヨモギは、やつぱりタダモノじゃないよね！

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。